

政教社の国粹主義（下）

荻 原 隆

目 次

- 序論—日本の保守主義の貧弱—
- 一 政教社の設立趣旨
- 二 今外三郎
- 三 加賀秀一
- 四 三宅雪嶺（以上前号）
- 五 菊池熊太郎（以下本号）
- 六 杉浦重剛
- 七 井上円了
- 八 小結—政教社の国粹主義—

五 菊池熊太郎

伝統について真正面からきわめて明快に答えているのは菊池熊太郎である。彼は札幌農学校で志賀と同期で、東京英語学校でも一緒に教師をした。

菊池はおそらく志賀の国粹＝美という定義を意識し、それを多少批判する形であろうと思うが、「国粹主義の本拠如何」（『日本人』第一六号，明治二一年一月一八日）や続編の同名論文「国粹主義の本拠如何」（同第一九号，同二二年一月三日）で国粹主義を論じた。まず，第一六号の「国粹主義の本拠如何」で国粹とはたとえば蒔絵や陶器や生糸のような（日本の伝統ではあるが，具象的な）工芸品の類を指すわけではなく，その国独自の精神性であるというはっきりとした定義を与えている。

「
国粹ハ { 無形的の元気なり
 一 国の特有なり
 他国に於て模擬すること能はざるものなり }¹⁾

この国粹一般についての定義はいちおううなづける。では，日本の国粹とは何か。

それは「我が帝室に対する国民の感情即ち是のみと此の感情を除きてハ吾輩の眼中一も国粹なきなり，」²⁾。国粹とは国民の皇室に対する感情以外にはないと菊池は断言している。国粹一般の定義も日本の国粹についての解釈も明快である。

菊池は続編の第一九号の「国粹主義の本拠如何」で貴兄の国粹の定義は妥当だが，やや狭隘ではという批判に答えて，自分の言う国粹は帝室の保持それ自体ではなく，（幅広い）国民の皇室に対する尊崇の念で，これによってこそ国家の隆盛も可能になると力説している。

「余輩の所謂国粹保存と帝室保存とハ、到底之を同一に見做すこと能はざるものなるべし、帝室に対する国民の感情を以て、日本国粹と称するときハ、両者は異語同意のものゝ如く考へらるべしと雖とも、こは深く推考せざるの誤解のみ、謬見のみ、」³⁾

「要するに、帝室保存を主意とする方案、必ずしも国粹論者の意見と符合一致せざるなり、之と反して国粹を保存し助長せんとする方略は、必ず帝室の安固を致し、兼て国民の幸福を伸張するなり、是れ国粹保存と帝室保存と少しく異ならざるを得ざる所以なり、嗚呼帝室に対する我々国民の感情一此の感情の性質ハ、苟も日本国を憂ふるものゝ考究せざるべからざる所なり、我が帝室の隆盛安寧も、我が国民の富強独立も、単り此感情に係れり、単り此感情に係れり。」⁴⁾

帝室の存続それ自体とそこに対する（幅広い）国民の尊崇の感情とはひとまず別で、後者こそ国粹主義であるという考え方は国民国家の創設期というこの時代にふさわしい。一種の国民国家時代の国体論である。

しかし、いくつか大きな無理が論理にある。まず、国民の皇室への尊崇の感情という日本の国粹の定義であるが、これまで国民一般は特別皇室に強い思い入れを持って生活してきたわけではない。皇室の存在が再び強く意識されだしたのは、幕末からであり、そして、国体精神の国民への注入は明治憲法体制の成立とそれに伴う教育勅語の発布があった明治も中期を過ぎてからで、この論文が書かれて以降ということになる。これを菊池はどう考えていたのであろうか。もし、いつの時代も国民の行動規範の中心が皇統であったとすれば、菊池はそれを論証しなければならない。そんな実証ができるであろうか。

また、国粹保存が国民の独立富強に必然的に連関すると締めくくっているのもどうであろうか。菊池は「処世論」(『日本人』第一号、明治二一年四月三日)、「志士処世論 第一 処世の準備(前統)」(同第四号、同五月一八日)、「志士処世論 (其三)」(同第六号、同六月一八日)、「志士処世論 第四(結論)」(同第一四号、同一〇月一八日)でも「抑も我々政教社員が我国固有の美質を発揮養成するを以て主義とする所以のものハ、又是れ国力の蓄積上最良の方便たるを以てなり、」⁵⁾と書いていて、伝統の保存と国力の発達をいっしょくたにしている。また、それらを勢力保存や優勝劣敗のような科学的観念によって牽強付会している。ようするに志賀の場合と同じで、国粹主義を伝統主義という意味と、勢力の保存拡大という意味の二重に使ってしまっているのである。おそらく、国粹主義は古いというような批判をも意識して、国粹保存によって富強も実現できるとやや強弁し、皇室の尊重と国家の隆盛、広く言って伝統と近代・科学法則とを強引に連結したのである。

その傾向がもっともよく出てくるのが「新保守党なる名称は熨斗付きの儘返却すべし」(『日本人』第二八号、明治二二年七月三日)である。菊池は政教社に対する新保守党という評価に憤慨し、『日本人』第二四号(明治二二年五月七日)の同人たちの「国粹保存」の宣言を再引用して反論した。

「余輩自ら揣らず、世に卒先して国粹保存の旨義を唱道……今より以往肅肅たる鞭策を振ひ、奮起勇進して国粹顕彰の旨義を取り、帝国の元気を振作し、帝国の秀美を開発し、兼ね

て帝国を萎蕤すべき政治, 宗教, 経済, 社交, 文学, 技芸等諸般の弊風を排せんと欲す, (中略)

余輩ハ模倣主義の盛なるを見て, 国粹論を唱道するの必要を見たり。若し世人にして, 泰西の新種を入るは, 国家固有の特権を伸長するにあることを忘れず, 一も二もなく, 模倣的に走るが如き悪弊に陥ることをなさず, 真正の進歩なるものは, 国家固有の秀質を萎微せしめずして, 兼て外邦の美質を移植するにあるものなることを曉りたらんには, 余輩豈に国粹論を唱道するの必要を見んや。」⁶⁾

自分の主張は欧化主義の模倣を排することにあり, 民族固有の美質の発揮と国家の興隆は矛盾しない, 国粹主義と進歩発展は両立すると力説しているが, 事実はそのようではなかろう。これは一種の詭弁である。伝統にこだわりつつ, 欧化を受け入れれば, そこには深刻な葛藤があり, 欧化主義の重要な変更があるはずである。欧米の進歩とは違った形で「進歩」なり, あるいは良い意味での「保守」「持続」があってよいのである。これを正面から考えようとするのが国粹主義ではないのか。菊池はこの重要な問題をごまかし素通りしてしまった。そして, この問題を回避する限り, 真の保守主義は生まれてこないのである。

菊池のような国体論的タイプは多い。東京大学文学部を卒業し, 哲学館・第一高等学校で教え, 郁文館中学の創立者である棚橋一郎も(菊池以上に旧弊な)皇国主義者で, 「帝室と人民」(『日本人』第一八号, 明治二一年一二月一八日), 「堯舜の治果して今日に起す可らざる乎」(同第二四号, 同二二年五月七日)などで皇室と臣民が他国とは違って親族で強い道德的關係で結ばれてきたと強調している。

杉江輔人(すけと)もそうである。彼は東京大学文学部を卒業後, 会計検査院や宮城師範兼中学, 東京英語学校などに勤めた。彼は「士氣振ふべし(第一)」(『日本人』第一号, 明治二一年四月三日), 「我邦の士風を如何して振興すべきか(結論)」(同第七号, 同二一年七月三日)で, 次のように書いている。

「敷島の日本心を人間ハゞ旭日に匂ふ山桜かな」とハ高士の名吟なり(中略)嗚呼我邦ハ桜花の艶嬌に於てハ今猶ほ此の如く之れを外人に誇るを得べきも独り人民の元氣に即ち我邦の日本魂に至りてハ如何ぞや依然として旧体を改めず」⁷⁾

文明開化の世に国民の士氣が振るわない, 日本人魂を奮い起こせという議論である。その士氣の軸になるものは何か。

「蓋し王室崇拜の心広く人心に浸潤し, 累世承伝一種の遺伝質となりて, 到底一二人力の能く動し得べからざる者あるに依ればなり, 必竟するに, 此氣質ハ吾邦人民特有の稟性にして異邦多く其例を見ざる処なり, (中略)国内に跼々として同胞同士相争ふの秋に非ず, 万人一致外異邦の侮を防ぎ国威国名を発揚するを務めざるべからず, 而して人心弛廢の今日に当り如何せば可なるか, 憑倚すべきハ唯夫れ祖先相伝の王室崇拜心あるのみ, 普天の下, 率土の濱, 苟も之を汚瀆するものハ王室の敵なり, 国家の敵なり, 将又国民の敵なり,」⁸⁾

皇室への尊崇以外にはないということである。

その他, 辰巳小次郎もこのタイプに属する。彼は東京大学文学部を卒業し, 哲学館・第一高等

中学などで教えた。彼の「日本人の外人尊奉」(『日本人』第一号, 明治二一年四月三日)や「賢所は死を以て護れ」(同第一〇号, 同二一年八月一八日)を読むと、「儒教仏法皆外国より渡りし者なり皆日本の教に違へり」⁹⁾で、「日本古来の教ハ天皇即天孫のみを貴とし万民を皆賤とす皇族に非ざれば皇位を嗣く事なし」¹⁰⁾であり、「古の日本人の外教を信奉せしハ全く外教の長を取り内教の短を補ハんとせしが故なり」¹¹⁾だったのに、「今の日本人多くハ生国を忘れて外国のみを知り我を客とし彼を主とする傾向あり善く古の人のなせし事を見て己が過失を正さん事甚だ望まし」¹²⁾と述べている。また、美術調査に名を借りて、高野山の本尊を強引に開封したことがあったが、賢所に奉安されている神器を外国人に開示するようなことは絶対にあってはならないと書いている¹³⁾。

もちろん、政教社は明治政府の専制を批判する進歩性をあわせ持っており、明治憲法の発布直前の『日本人』(第一八号, 明治二一年一二月一八日)ではいっせいに責任内閣制を主張しており、たとえば同号に菊池は「日本国粹を保存し助長せんとすれば責任宰相の制を設けざるべからず」を、辰巳は「風憲論」を、杉江は「大臣の弾劾を論ず」とさらに第二三号(明治二二年三月三日)に「聖徳を冒瀆するの嫌なき乎」を載せ、責任(政党)内閣制を要求し、既述の棚橋の「帝室と人民」も国会に弾劾権を与えよと言っている。国体論と近代の政治制度をなんとか調和させようとしているのである。

しかし、国体論そのものについてはアプリオリな前提であって、議論の深まりがない。たとえば、彼らはなぜ皇統の一系が生まれてきたのかを考えていない。辰巳の「政教相関論」(『日本人』第二一号, 明治二二年二月三日)は民族の風土気風と政教の関連性を論じ、日本には日本の国体があるというような書き方をしているが、日本の風土気風を詳しく分析した上で政治宗教との関係性について説得力のある考証を展開しないと国体の歴史的由来についてなにも答えたことにはならない。また、皇統の一系は日本の有力な伝統であるとしても、一般国民が皇室への尊崇をいつも行動規範の最上位に置いてきたわけではない。それをどう考えるのか。そして、明治のこの時代にいわゆる国体論が、広く世界に誇りうる普遍性を持つであろうか。これらの点について納得のいく答えがないと、新しい時代の国体論にはならないのである。

注

- 1) 「国粹主義の本拠如何」(第一次『日本人』第一六号, 明治二一年一二月一八日)。
- 2) 同。
- 3) 「国粹主義の本拠如何」(同第一九号, 同二二年一月三日)。
- 4) 同。
- 5) 「志士処世論 第一 処世の準備(前統)」(同第四号, 同二一年五月一八日)。
- 6) 「新保守党なる名称は熨斗付きの儘返却すべし」(同第二八号, 同二二年七月三日)。
- 7) 「士気振ふべし(第一)」(同第一号, 同二一年四月三日)。
- 8) 「我邦の士風を如何して振興すべきか(結論)」(同第七号, 同二一年七月三日)。
- 9) 「日本人の外人尊奉」(同第一号, 同二一年四月三日)。

- 10) 同。
- 11) 同。
- 12) 同。
- 13) 「賢所は死を以て護れ」（同『日本人』第一〇号，同八月一八日）。

六 杉浦重剛

杉浦重剛は安政二（1855）年，膳所藩に生まれ，同藩貢進生として大学南校・開成学校に学び，明治九～一三（1876～80）年にイギリスに留学，農学校や化学学校，ついでユニバーシティ・カレッジなどで自然科学を学んだ。東京大学予備門長，文部省参事官兼専門学務局次長，東亜同文書院院長，東宮御学問所御用掛などを歴任，この間，東京英語学校の創設にかかわり，また，小村寿太郎らと乾坤社を作り，井上馨の条約改正に反対し，さらに，谷干城らと日本倶楽部を結成して大隈重信の条約改正に反対したことは周知のとおりで，政教社の設立には後見人ともいうべき役割を演じた。

彼は「理学宗」を唱えたことで知られているように¹⁾，留学によって最新の物理化学的知識を身に着けたという自負からであろうか，それですべての社会現象を説明できるというような「最新の」考え方を披歴しつつ，しかも，一方で古代の祭政一致を賛美し，日本人の固有性を保持することが教育の基本で，国体も勢力保存の法則によって説明できると豪語している。ようするに自然科学的世界観と国体思想が奇妙奇怪な結合をなして，今日的視点から見るときわめて理解しがたい様相を呈している。たとえば『日本教育原論』（明治一九～二〇年）や『倫理書』（同二五年）第四章「報国篇」では次のように高らかに宣言している。

「余ハ日本教育ノ基礎即チ日本人タルニ必要ナルノ教育ヲ施スノ原素ハ，古来日本人ニ特有ナル精神ヲ保存スルニアリトス。或人ノ歌ニ

敷島の大和心を種として

読めや人く異国のふみ

トアリ。（中略）

即チ茲ニ余ガ嘗テ起草セン論文ヲ掲出シ以テ其ノ大意ヲ示サントス。

人事モ亦物理ノ定則ヲ離レズ

大凡天地間ノ事物ニ就テ之ヲ見ルニ，人事程複雑ナルモノハナキガ如クナルヲ以テ，世人動モスレバ人間ノ間ニ行ハル、事件ハ他ノ道理ヲ以テ之ヲ推スコト能ハザルガ如クニ思考スレドモ，我輩ハ其ノ必ズ然ル可カラズシテ，他ノ現象ト其帰ヲ一ニスルモノタルコトヲ論弁セント欲スルモノナリ。我輩ガ特ニ茲ニ物理ノ定則ヲ人事ニ応用セントスルモノハ，所謂勢力保存論是ナリ。蓋シ此勢力保存論ハ当時物理学者ノ守本尊トスル所ナレドモ，之ヲ拡張スレバ何事ニ付ケテモ応用シ得ベキヲ以テ，凡ソ天地間ニ行ハル、事件ハ凡テ之ニ包有スルヲ得可シト信ズ。」²⁾

「茲に国と称するは，我日本国を指したるものにして，即ち二千五百有余年の歴史を有して，

此土地に居住せる同胞四千万の人民が、万世一系の皇室の下に、政治上の団結を為せるものは是れなり。(中略) 其れ此の如くなるが故に、勤王報国は終に同一義にして我皇室が此地位を領せらるゝ所以の淵源は、之を歴史に徴し、勢力保存の原理に照さば、自から明瞭ならん。」³⁾

科学法則一元論のような考え方はヨーロッパにもあり、志賀も菊池もそうだったが、杉浦もまた科学法則によって社会現象もすべて説明できるという言い方をしている。「勢力保存論」という最新の科学的知見によって世相を啓蒙したいのであろうが、当時の水準から見ても、過度の素朴科学主義に見えたのではあるまいか。言っていることがかなり奇怪である。我々が生物的存在として一方で物理化学の法則に支配されているのはそのとおりであるが、他方で意志や理性や豊かな感情を持っているから、すべての社会現象を物理化学の法則で割り切ることは当然できない。そこに人間の人間たる尊さも愚かさもあり、社会現象の複雑さや伝統の伝統たるゆえん、彼の崇拜する国体の理由もあるのだが、その程度のことが杉浦には理解できなかったのであろうか。

こうして杉浦は滑稽とも思えるほどの科学信仰者でありながら、一方で、頑固な民族主義者・国体論者であった。しかし、社会現象はもちろん、とくに伝統は勢力保存の法則によって説明すべきものでもないし、できるものでもない。事実、説明になっていない。杉浦は最新の科学的知識でこじつけてはみたものの、本質は旧態依然たる頑固な国体論者に過ぎない。

そして、そうであるかぎり、彼からすぐれた伝統主義が生まれる可能性はほとんどないと言ってよい。「日本教育の方向」(明治一九年)、『日本教育原論』(同一九～二〇年)、「日本学問ノ方針」(『日本人』第一号、同二一年四月三日)の次のような一説はこの国体論者の思想的貧困をよく表している。

「之を約言すれば今日西洋の文物を輸入するにも、前述の如く支那の文物を輸入したるときと一般に、取るべきを取り捨つべきを捨て、以て我国体を誤らざるを期すべし。(中略) 蓋し西洋の文明とは理学の応用を以て其主眼とすれば、此一点こそ東洋各国人が最も力を致して務む可き所なり。」⁴⁾

「顧ニ近来西洋ノ学大ニ我国ニ流行セシ以来、善悪可否ノ差別ナク悉トク西洋物ヲ採リ用フルハ一般ノ風習トナリタレド、(中略) 成程物理学ノ一点ニ到リテハ実ニ卓絶セル所アリト雖モ、人事上ニ渉レル事ハ矢張古人ヲ祖述スル所ナキニシモアラズ。」⁵⁾

「西洋ト交通シテ以来益ヲ受ケ又害ヲ受ルモ皆此理学ノ応用ニシテ其他ノコトニ至リテハ左程ニ感心スヘキコトノミニアラス(中略) 元来長ヲ取り短ヲ補フト云フハ万人一口ニ同意スルノ語ナレドモ長ヲ長シ短ヲ補フノ論モ亦極メテ必要ナルコト余ハ深く信スルナリ」⁶⁾

西洋文明のもっとも優れたところは科学精神であり、これによってすべての現象が説明できるということと、科学以外はあまり感心しない、日本には日本の伝統があるという主張は大きく食い違うものである。すべてが科学法則に還元されるなら、西洋が良いとか悪いということも本質的な意味がなくなる。そして、西洋には西洋の制度文物があるが、日本にも日本の制度文物があるという考え方は悪しき相対主義で、伝統に広い視野から検証と反省を加え新しい時代にふさわしい高さに引き上げていこうという普遍主義は生まれて来ない。また、西洋文明が形而下の学問技術に過ぎないというような言い方はナンセンスで、科学それ自体は因果関係を究明する学問で

あるが、同時に精神生活への巨大な影響力という意味で明らかに精神文化という側面を持つ。杉浦はこの点も全然分かっていない。

少し後の著作になるが、『天台道士著作集』（大正四年）所収の「日本国民の抱負」（明治二八年一月一七日）や『日本の精神』（大正五年）所収の「洋行の主眼」（明治三〇年七月二九日）では次のようにも述べている。

「抑々欧米の諸強国人と称するもの、其物質的進歩上に於て或は賞賛すべきもの多かるべしと雖も、万物の靈長たる人間の品位上より之を見るときは、之を第一流に置くべきものなるや否や、是れ余輩の甚だ疑ふ所なり。」⁷⁾

「然れども既に彼（洋行者）が風土習俗文物制度に親密となり、彼が短所弊風の存するを看破せる今日に於て、尚一も二もなく崇欧拜米の渦中に捲込まれ、徒らに皮相的文明に心酔し物質的進歩に驚倒するに至りては、是抑も何の心ぞや。」⁸⁾

西洋はようするに物質文明に過ぎないと言うのには哑然とさせられる。彼はわざわざ留学していったいなにを勉強したのであろうか。西洋文明は豊かな精神性を当然持っており、それは物質文明の進歩によって促されたところが多い。もちろん物質文明はある部分で道德風俗の悪化を引き起こす。進歩に影があるのはよいことではないが、不可避の現象である。東洋道德にもさまざまな弱点があるではないか。西洋文明は高い精神文明でもあり、ただそのありかたが中国や日本と違うだけのことである。そして、総体として当時の西洋の精神文化は日本や中国より高いとみななければならない。西洋は物質文明で、我々は精神文明であるというような誤解も甚だしい考え方からいったい何が生まれるであろうか。

このように杉浦は固陋な国体論者であり、西洋文明に対してもおかしい偏見を持っていた。彼はこの国体観念によって歴史を解釈するわけであるが、それは正しいであろうか。それを概観しておこう。杉浦によると日本人は古代から独自の文化を守りながら外来文明を接受してきた。たとえば、中国文明やインド文明に対してもそうである。「日本教育の方向」（明治一九年一月一日）から引用する。

「我日本は東洋建国の一にして其年所を歴ること極めて旧く、其の人民の気象に到りても古来一種特別の品性を存し、中古以来支那の文物を輸入するより多少の変化を来したりと雖も、其の大体に到りては敢て変ずることなく、又仏法の伝来して全国に蔓延し上下貴賤の別なく人心に浸潤せし事ありと雖も、遂に天下の大勢を左右する程の勢力を得るには到らざりき。顧ふに我国建国の体裁に於ては神代は暫らく措き、神武以来皇統連綿以て今日に到る。其の因て来る所の一源深遠なるの致す所にあらずして何ぞや。若し夫れ我國民にして一種特別の気風なからしめば、支那文物の輸入と仏法の伝来とは共に我国体上に大變革を生じたることなるべけれど、曾て此事なく遂に宇内に一種無類の国体を存するに及べり。試に見よ、支那国の如く我が国の学問道德の師匠とも云ふ可き国柄たるにも拘はらず、其国の歴史を檢視れば直に其論ずる所、其行ふ所にあらざるを見る可し。忠臣の跡を論ずるに汲々とするを見ても、亦以て忠臣の極めて稀なるを知る可し。而して乱臣の跡は歴世相踵ぎ、其際大節を誤るの学士其人に乏しからず。然るに我国に於ては其学風の余流を汲みたるにも拘はらず、却て

支那道德の精神を得たる人に乏しからず。此等の点に於ては支那と我国とは頗る趣を異にする所あるが如し。」⁹⁾

日本には万世一系の皇統（国体）があり、そこを基軸として、あるいはそれは変えずに中国文化なりインド文明を取りいれてきたところに大きな特色がある、日本が人心治まり、秩序が整い、道德が良かったのはこの国体思想のなせる業であるというのである。日本には日本の独自の伝統があり、それは中国やインドとは違うという言い方は肯定できるが、この結論を導き出すには日本精神史について体系的で重厚な研究の成果を必要とする。実証にも論理にも裏付けられずに、日本の伝統を分かりきったものとして決めつけるところに彼に限らず日本の保守主義者の大きな弱さがある。

そして、彼の国体こそ日本の伝統という主張であるが、国体を政治的にとらえて天皇親政という意味に解釈すると、言うまでもなかろうが、武士の時代はあきらかにその否定である。武家政権に先立つ貴族の摂関政治もすでに天皇の支配とは齟齬をきたしていた。したがって、一系の皇室の継続を以て、ただちに天皇親政という意味で国体思想が貫徹し、名分が守られてきたことにはもちろんならない。その時の実質的な支配者によって名分はいかようにも破られてきた。

また、杉浦は皇統が存続することによって人心が落ち着き、上下秩序が保たれてきたという言い方をしているがこれも実証的でもなければ論理的でもない。日本の世態人情がもっとも落ち着いていたのは、言うまでもなく江戸の太平の世である。この時、日本は世界でも類例のない平和を謳歌していた。ところが、江戸期は武士の支配が完成し、政治的には天皇の力がもっとも弱まった時代である。なぜ、国体がもっとも衰微した時代にもっとも人心がおだやかだったのか。杉浦の理屈は完全に破綻しているではないか。そうすると、国体論と平和の世に関係があるとしても、国体が一貫していたから平和であったわけではあるまい。日本の平和はもっと別の歴史的背景に求めなければならない。論理的にはそういう結論になる。

さらに、杉浦の言い分を認めて一系の皇統のおかげで名分的秩序が保たれたとして、なぜ日本だけが一系の皇統を守れたのかという歴史文明的考察がまったくない。これが多くの陳腐な保守主義者の場合と同様、彼の立論をますますつまらない、平板なものにしているのである。

こうして見てくると、杉浦は旧弊固陋な国体論者に過ぎず、その考え方は西洋文明に対しては浅薄で、いちじるしい偏見があり、ひるがえって日本文明についても深い認識に乏しく、実証性も論理性もなかったことになる。総体として価値の低い思想の持ち主であるが、このような人物が日本の保守主義のひとりの中心としていたのである。

注

- 1) 杉浦「理学宗に就て」（『明治会叢誌』第五〇号、明治二六年一月）、明治教育史研究会編『杉浦重剛全集』第一巻（昭和五八年、杉浦重剛全集刊行会）、七四八～五〇頁参照。仁義礼智も国家の盛衰も勢力保存の法則で説明できると豪語している。以下、『杉浦重剛全集』は『全集』と略す。また、猪狩史山『杉浦重剛（新伝記叢書）』（昭和一七年、新潮社版）、五八～六二頁。

- 2) 『日本教育原論』（『読売新聞』、明治一九年六月二二日～同二〇年一月九日にかけて断続的に掲載）、『全集』第一巻、八四～五頁。
- 3) 『倫理書』（明治二五年）、『全集』第四巻（昭和五七年）、一八、二〇頁。
- 4) 「日本教育の方向」、（『教育時論』第五七号、明治一九年十一月一五日）、『全集』第一巻、一九〇頁。
- 5) 『日本教育原論』、『全集』第一巻、九〇頁。
- 6) 「日本学問ノ方針」、（第一次『日本人』第一号、明治二一年四月三日）、『全集』第一巻、一九二頁。
- 7) 「日本国民の抱負」、（『東京朝日新聞』、明治二八年十一月一七日）、『全集』第一巻、三六四頁。
- 8) 「洋行の主眼」、（『東京朝日新聞』、明治三〇年七月二九日）、『全集』第一巻、五〇九頁。
- 9) 「日本教育の方向」、（『教育時論』第五七号、明治一九年十一月一五日）、『全集』第一巻、一八八頁。

七 井上円了

井上は安政五（1858）年、越後は長岡の真宗大谷派慈光寺の後継ぎとして生まれた。東本願寺で得度したあと、新潟学校第一分校（旧長岡洋学校）に学び、ついで、京都の東本願寺教師教校英学科に入学、さら東本願寺の留学生として東京大学予備門および文学部哲学科で学んだ。哲学館（のちの東洋大学）の創設者として知られる¹⁾。

彼は創刊直後の『日本人』に「日本宗教論緒言」（『日本人』第一号、明治二一年四月三日）・「日本宗教論（其一）～（其五）」（同第四、六、七、八、一、二、三、四、五号、それぞれ同六月一八日、同六月一八日、同七月三日、同七月一八日、同九月一八日）を載せているので、これらと比較的初期の著作『真理金針（初編・続編・続々編）』（明治一九～二〇年）、『仏教活論序論』（同二〇年）、『仏教活論本論 第一篇 破邪活論』（同二〇年）・『仏教活論本論 第二篇 顕正活論』（同二三年）、『教育宗教関係論』（同二六年）、あるいは『哲学館講義録』などを中心にその思想を検討してみよう。

井上の著作を読んでまず気がつくことは、仏教（あるいは広く宗教一般）をイデオロギー、つまり国家の防衛や拡大の手段・道具と見る傾向が非常に強く出てくることである。この点で杉浦と似ている。たとえば「日本宗教論緒言」（『日本人』第一号、明治二一年四月三日）を読むと、『日本人』の創刊に欣喜雀躍する思いである、発行の趣意を国民に一人残らず共感させたいと述べたあと、次のように書いている。

「退テ考フルニ今日ノ日本人ヲシテ其形ヲ西洋ニシ其色ヲ西洋ニシ其耳目ヲ西洋ニシ其脳髓ヲ西洋ニシ其風俗宗教言語文章坐作進退ニ至ルマテ悉ク之ヲシテ西洋ナラシメバ其人已ニ日本人ニアラス其国已ニ日本国ニアラサルヘシ是レ豈日本人ノ務ムル所ナランヤ苟モ日本人ヲシテ永ク日本人タラシメント欲セハ日本人ノ日本人タル精神思想ヲ存シ日本人ノ日本人タル習慣遺伝ヲ保タシメサルヘカラス然ラサレハ決シテ日本人ヲシテ東洋ニ独立セシメ西洋ニ對抗セシムルコト能ハズ故ニ若シ日本人ヲシテ独立對抗セシメント欲セハ宜ク之ヲシテ永ク日本人タラシルコトヲ努メサルヘカラス」²⁾

井上の文章には政教社同人として当然と言えば当然だが、文化的にも政治（国権）的にも強いナショナリズムが湧き出していて、西洋に対する激しい対抗心もしくは警戒心や恐怖心がむき出しになっている。この対抗心・警戒心の激しさは政教社の中でも一、二を争うものであろう。

彼はこの観点から仏教をとらえ、続けて日本には「古来儒仏神ノ三教」があるが、「仏教ハ日本人ノ日本人タル主元素中ノ主元素ナリ」³⁾となんの躊躇もなく断言している。こう言えるかどうかは重大な問題なのであるが、さらに仏教は「学理」にもかかなうから、旭日の勢いのキリスト教に対抗して宗教世界を「占領」できる、したがって、仏教を「維持拡張」すれば日本人の世界支配も可能であるさえ述べている。

「果シテ然ラハ仏教ハ維持拡張スルハ管ニ日本人ヲシテ日本人タラシム一助トナルノミナラス日本人ヲシテ世界ヲ圧倒シ地球ヲ併吞セシムルノ先鞭トナルモノナリ」⁴⁾

その他、「日本宗教論（其四）」(『日本人』第八号, 明治二一年七月一八日) や『仏教活論序論』(明治二〇年) でも次のように書いている。

「其中我か最も恐るべく且つ注意せざるを得ざるものは西洋の国力の強盛なるにあり、若し我か国力彼に抗敵すること能はざるときは、百般の事々物々其利害得失を問はず皆我を棄て、彼を取るに至るべし、若し之に反して我邦今日の勢西洋より強且つ大ならば我が風俗宗教却て彼を制し彼を圧するに至るへし、」⁵⁾

「これによりてこれをみるに、将来わが国の学問をして東洋に独立せしめ、わが国の宗教をして西洋に超駕せしむるものは、それただ仏教にあらんか。わが国の教学をして世界を圧倒し地球を併吞せしむるものは、またただ仏教にあらんか。わが日本の国威をして宇内に輝かしめ、わが日本の名声をして万世にとどかしむるもの、またまた仏教にあらんか。」⁶⁾

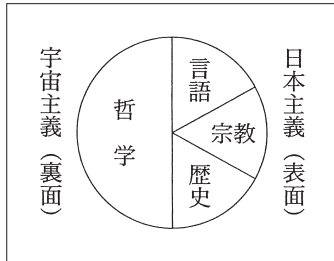
これは主張にいつその勢いや強さを出そうというレトリックであろうし、世界支配というのは宗教的精神的な意味であって実力で領土をといてのではないのだろうが、文字通り受け取るともはやナショナリズムにとどまらない超国家主義の気配があり、気宇壮大転じてやや誇大妄想の気味があるとする言えるのではないか。そこまで言わせるほど西洋が怖かったのでもあろう。

決定的な問題は井上がキリスト教も西洋文明も仏教もその普遍性や世界性を捨象して、たんなる国家防衛もしくは拡大のイデオロギーとしてしか扱っていないことである。これが杉浦の場合と同様、井上の最大の弱点であり、その主張を価値の低いものにしてしまった。こうなってしまうと仏教に明治の日本にふさわしい新しい息吹や解釈を与えることができなくなる。また、普遍性への希求がないところでは、西洋文明を批判しつつ高めることも、ひるがえって仏教を含めた国粋主義ないし日本の伝統を批判しつつ深めることも不可能である。

もっとも、これについては別の意見もあるので触れておきたい。たとえば高木宏夫『井上円了の世界』(平成一七年)は井上の『哲学館講義録』から次のような文章を引用し、右翼的だとか、国家主義的だという見解を批判している。なお、同書は井上の文章を『哲学館講義録』第三〇号からの引用としているが、正しくは第二九号で、タイトルは「哲学館目的ニツイテ」、明治二二年一〇月一八日付である。

「哲学ニモ亦理論ト實際トノ二アリ理論ハ宇宙ノ真理ヲ研究スルコトヲ目的ト為シ實際ハ人間社会ノ利益幸福等ヲ目的ト為スナリ彼ノ社会平等人權同等等ハ理論無差別ノ点ヨリ論スルナリ然レトモ實際差別ノ点ヨリ論スレハ階級アルコト亦必然ノ理アル可シ凡ソ此ノ如クナルヲ以テ表面ノ主義ト裏面ノ学理トハ互ニ権衡平均ヲ得セシムヘク決シテ一方ニ偏セシム可カ

ラス若シ一方ニ偏スレハ不測ノ大害ヲ生スルコトアル可シ現ニ我邦維新ノ始メ西洋ノ文物制度ノ美盛ニ眩シ未タ日本ナル主義ヲ定立セスシテ一ニモ西洋ニニモ西洋ト殆ト利害善悪ヲ顧ミルニ暇アラス妄リニ之ヲ模シ妄リニ之ヲ取り殆ト宇宙主義ノ傾向アルカ如クナリシヲ以テ数年来学者頗ル之ヲ憂ヒ以テ日本主義ノ必要ヲ感スルニ至リシニアラスヤ



以上ヲ概括シテ哲学館ノ目的事業ヲ図解ヲ以テ示セハ左ノ如クナル可シ即チ表面ヨリハ言語宗教歴史ヲ以テ日本主義ヲ構成シ以テ日本独立ノ精神基礎ヲ確立シ裏面ニ於テハ宇宙主義即チ普ク宇宙間ノ真理若クハ哲理ヲ研究スルニ在ルナリ

」⁷⁾

高木は井上の考え方では日本主義が表で宇宙主義（哲学）が裏でこれを支えており、ユニバーサな立場が貫かれているという説明を与えているが⁸⁾、どうであろうか。それにしても日本主義と宇宙主義が実に安易に結び付けられており、宇宙主義は日本主義の手段に過ぎないように見えるが。もし普遍主義の立場に立つなら、少なくとも宇宙主義が表で日本主義が裏だと言うべきではないか。また、これを悪く使えば、日本主義が宇宙主義と表裏一体だから、超国家主義の思想にもなりうる。かりに井上が真剣に普遍主義を追い求めていたとすれば、両者の鋭い葛藤に人生の上でも著作の上でももっと悩んだであろうし、普遍主義からの鋭い批判や疑問が国家や日本主義に対して投げかけられたであろう。それが見当たらないのは、井上が思想をイデオロギーとして取り扱っているからである。

井上の「護国愛理」という言葉は関係者によく知られているようであるが、これも日本主義と宇宙主義の場合と同じで、両者の違いを認めてはいるが、その葛藤に誠実に苦しむというより、多少強引に結び付けつつ、結局国家の論理にくみしているように見える。

「しかれども国家もし成立せず、人類もし現存せざれば、真理ひとり存するも、だれかよくこれを知り、またよくこれを講ぜんや。けだしこれを講ずるは、知者学者を待たざるべからず。知者学者を生ずるは国家の独立生存を要するなり。故に学者いやくも真理の講ずべきを知らば、必ずまず国家の独立に向かって祈らざるべからず。これをもって、護国の任は愛理の責に一步もその軽重を譲らざるを知り、あわせて学者の務るところ、護国愛理の二大事を兼行するにあるを知るべし。

これによりてこれをみれば、護国愛理は一にして二ならず。真理を愛するの情を離れて、別に護国の念あるにあらず。国家を護するの念を離れて、別に愛理の情あるにあらず。その向うところ異なるに従って、その名称同じからざるも、帰するところの本心に至りては一なり。この心をもって国家に対すれば護国の丹誠となり、この心をもって真理に対すれば愛理の精神となる。」⁹⁾

井上が『日本倫理学案』（明治二六年）や『勅語玄義』（同三五年）などを書いて、教育勅語に

一も二もなく礼讃・平伏したことも知られているが、思想をイデオロギーとして見る井上がそういう態度をとるのは自然であろう。『教育宗教関係論』(明治二六年)では次のように述べている。

「教育は勅語に基づくゆえんはもとより説明を要せず。そもそも勅語はわが国体をもととしてこの国特有の人倫道德を諭したまえるものなれば、いやすくも国民たるもの徹頭徹尾その聖旨を遵守せざるべからず。(中略) これすなわちわれわれ臣民が人倫の大道を守るはひとり上、天皇に対して忠義を尽くすのみならず、われわれの祖先に対して孝道をまっとうするものなるを諭したまえるものなり。しからばわが国の教育は忠を経とし孝を緯とし、忠孝一致、国体為本の方針をとらざるべからず。

つぎに余が宗教上仏教をとるゆえんは、今日世論のあるところなればいささかここに論述せざるべからず。世人仏教を評して厭世教なり平等論なりという。実にしかり。仏教は出世間を目的とするをもって厭世教なり、貴賤貧富の人に一味同感の快樂を与うるをもって平等論なり。これ仏教特有の性質なるにあらずして宗教通有の性質なりというも可なり。けだし宗教の世間に加わりて社会を益する点もまた全くここにあり。しかれどももし仏教が厭世一方を説きてその裏面に愛世の道理あるを知らず、平等一方を論じてその表面に差別の現象あるを示さざるにおいては、あるいは社会国家に適合することあたわざるの恐れあるべきも、その教えは中道をもととして平等の中に差別を存し、厭世の中に愛世を失わず、有に偏せず空に偏せずその中間に両端を兼備せる真理を開示したるものなれば、その一方に存する平等厭世の理論は他方に応用するに当たりてたちまち君臣上下の階級を生じ、忠孝人倫の大切なるを知るに至る。(中略) 故に仏教はひとたび平等門を開き終わりにて差別門に出ずれば、その表面に君臣の名分、忠孝の至道歴然として存するを見るは火をみるよりも明らかなり。これをもって、わが国の仏教は国体とともに並進対行することを得るに至る。」¹⁰⁾

仏教もキリスト教も半面で権力や支配階級と癒着してきたことはそのとおりである。いかなる宗教も社会の中で生きるわけだから、時の権門勢家を無視はできない。しかし、世俗の権力や富貴と少なくとも緊張関係に立つのがまともな宗教であろう。表も裏もあるのは当然であるが、それに無神経に居直ってしまえば、宗教としてはもはや無価値である。

そして、仏教は本当に我が国の根本的伝統と言えるであろうか。井上は先述のように「日本宗教論緒言」(『日本人』第一号、明治二一年四月三日)で「其所謂宗教ニハ古来儒仏神ノ三教アリテ(中略)多数ノ人民ヲ薫染シ多数ノ思想ヲ占領シ其影響最モ重且大ナルモノハ独リ仏教ナリトス故ニ仏教ハ日本人ノ日本人タル主元素中ノ主元素ナリ」¹¹⁾となんら論証なしに仏教こそ日本人の本質的要素だと言い切っているが、これには重大な疑問がある。日本人はインド人のように強く涅槃や解脱あるいはよりよき生まれ変わりを希求する本来の宗教性をそれほど持っていないということは、幕末・明治の日本を見てもわかったであろう。日本仏教の本質はいわゆる葬式仏教の言葉が示すとおり、現生の幸福や利益のための儀式・祈祷であろうと思われるから、彼岸における魂の救済としての仏教から大きく逸脱しているし、またそこにこそ日本人の精神性の特徴がよく現れているはずである。それでも仏教が主元素だと言い切れるであろうか。もしあくまでもそう断言したいなら、これを論証しなければならない。また、日本化されつつ生活に深く根ざし

ていたという意味なら、むしろ、その日本化の内容と背景こそ仏教よりも主元素ではないか。それを検討してみるべきである。ところが、井上はこのような手続きなしに仏教が日本の主元素であることを大前提に議論している。これは学問的とは言えないであろう。

また、井上はこの「日本宗教論緒言」の中でキリスト教と対比して仏教は「学理ニ合シ開明ニ適スル古今不二東西無比ノ法」¹²⁾と述べている。彼は『真理金針（初編・続編・続々編）』（明治一九～二〇年）や『仏教活論序論』（同二〇年）・『仏教活論本論 第一篇 破邪活論』（同二〇年）・『仏教活論本論 第二篇 顕正活論』（同二三年）などでもキリスト教が超越神の存在を前提にして世界創造や原罪賞罰・善悪禍福を論じることを非科学的と繰り返し攻撃し、一方、仏教が因果によって世界の現象を説明するのを合理的と強弁しているが、このような比較自体が意味を持つであろうか。さらに、仏教の因果と科学の因果法則はそもそも別物であろう。

注

- 1) 井上の伝記については、東洋大学井上円了記念学術センター編：高木宏夫・三浦節夫『井上円了の教育理念―歴史はそのつど現在が作る』（平成一九年，東洋大学）などを参照。
- 2) 「日本宗教論緒言」（第一次『日本人』第一号，明治二年四月三日）。
- 3) 同。
- 4) 同
- 5) 「日本宗教論（其四）」（同第八号，同二年七月一八日）。
- 6) 『仏教活論序論』（明治二〇年，東洋大学創立一〇〇周年記念論文編集委員会編『井上円了選集』第三卷（昭和六二年，東洋大学），三四四頁。以下『井上円了選集』は『選集』と略す。
- 7) 「哲学館目的ニツイテ」（『哲学館講義録』第二九号，明治二二年一〇月一八日），東洋大学創立100年史編集委員会・東洋大学創立100年史編集室『東洋大学百年史 資料編Ⅰ・上』（昭和六三年，東洋大学），一〇六～七頁。
- 8) 高木宏夫『井上円了の世界』（平成一七年，東洋大学井上円了記念学術センター），四五～六頁。
- 9) 前掲『仏教活論序論』、『選集』第三卷，三三一～二頁。
- 10) 『教育宗教関係論』（明治二六年），『選集』第一一卷（平成四年），四八二～三頁。
- 11) 「日本宗教論緒言」（第一次『日本人』第一号，明治二年四月三日）。
- 12) 同。

八 小結―政教社の国粹主義―

政教社の主要な人々の思想を概観してきたが、ここから次のようなことが言えるであろう。

まず、第一に全体としてかなりバラつきがあるということである。たとえば、今外三郎は思想の内容自体から見ると政教社とは主義主張がまったく異なる。彼の考え方は志賀重昂の本音に近く、近代主義である。一方、伝統についての考え方がまとまっていない者、あるいはそれもあるが伝統に自信が持てない者もいる。三宅雪嶺と加賀秀一がそうである。三宅は伝統をどう定義してよいか答えられなかったし、加賀は日本人は意志や情熱が弱い反面、道徳的水準は高く礼儀正

しいと説明していて、このとらえ方はかなりの確であるが、世態人情の良さを儒教の影響に求めるような誤解もあり、また、こういう日本人の本質について明確な自信を持っていたようには見えない。なお、他の同人と経歴がかなり異なるので、本稿では取り上げなかったが、仏教の復興と布教の自由のために尽力した島地黙雷は有名な僧侶である。一方、国体論者はさすがに多く、菊池熊太郎、杉浦重剛らで、棚橋一郎や杉江輔人や辰巳小次郎もそうである。井上円了は仏教者であるが、国体論と癒着している。島地にもそういう傾向は否定できない。三宅も後年は国体論に回帰した。そうすると、政教社はやはり国体論が主流ではあるが、かなり思想的幅があるということになる。

第二に、論証の欠如、またそこから生じる論理性の破綻が見られるということである。これは一つには伝統と近代をしいて並び立て、あるいは国体の観念と最新の科学的知識が矛盾しないかのように説明しようとするところからきている。そして、もう一つには伝統解釈そのものの論証不足から由来する。国体論者も仏教家も皇統への崇敬や仏教が真に本質的伝統かどうかという詳細で体系的な論証が完全に欠けている。志賀や加賀の主張はそれなりに肯定できるところがあるが、まったくの論証不足という点では同じである。古代から近代までの周到な精神史が書けないと伝統については本格的に論じられない。この論証不足の上に立論されているために、論理の破綻や無理が多くなる。とくに頑冥固陋な国体論者である杉浦と仏教家である井上にこの傾向が強い。

第三に伝統を普遍性に結び付けようという姿勢の弱さである。国体論がこの点でまったく評価できないものであることは論を待たない。伝統（日本人の特性）の普遍化ということをもっとも明確に意識したのは三宅雪嶺であるが、彼の場合、伝統の内容をどうとらえるべきかが分からないまま、強引に両者を結合しようとするため、伝統の普遍化どころか、超国家主義に行き着く恐れがある。現に晩年の雪嶺はそうってしまった。そして、伝統の中から普遍的なものを的確に認識しそれを育てることができないと、伝統と近代の根本的な対立の問題は解けないのである。国体論者である菊池は国粹主義について統一した意見が持てないと告白しているが、結局それは、明治のこの時代、自信を持って世界に向かって主張できる伝統を見出せなかったことに帰着する。

よく、昭和の軍国主義は過度のナショナリズムの失敗であると言われるが、はたしてそうだろうか。むしろ日本人は伝統についてよく分かっていなかった、その本質がなにかを論証しようとすらしなかった、陳腐な思い込みで勝手な議論をしていただけである、こう言った方が正しいのではあるまいか。自分自身がよく分からず、正しい自信を持てない者ほど問題を起こすのである。

本稿の執筆に当たって、東洋大学附属図書館、同大井上円了記念学術センター、同大ライフデザイン学部三浦節夫教授に資料上のご教示と便宜を図っていただいたことを深く感謝いたします。